

五郎沼通信



この通信は、五郎沼の桜や周辺環境を守りながら、五郎沼の活用方法や今後のあり方を地域の皆さんと考えるために発行します。
(発行部数:200部)

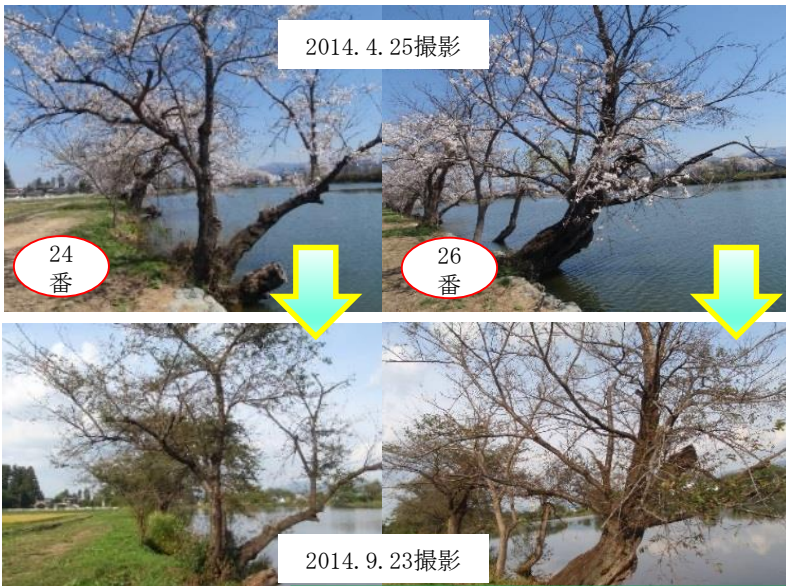
発行者：「五郎沼の桜を守る会」
事務局 瀬川峰雄
紫波町南日詰字小路口70-1
電話：019-672-2656 (FAX兼用)
携帯：090-2270-6771
E-mail：shiwajokaso@crest.ocn.ne.jp

本格的な施肥が必要！

11月8日(土)作業

左の写真は71本の桜の中で1・2番に弱っている(沼の西側堤体の24番と26番の)桜です。5月にグリーンパイルと言う簡易的施肥をしました。が、ご覧の通り残念ながら、どうも桜は以前同様に元気がない状態で、肥料はそれほど効いているようではありませんでした。

この状態写真と内容を、弘前城・桜の樹木医の小林さん(2月に五郎沼と城山で桜を
見て頂きました)に確認したところ、一やはり、根の周りを掘り、本格的に施肥をしなければならぬと思います。とのことでした。
4号(5月号)会報に特集し、事前にお知らせしていたとおり、多少大掛かりですが、みなさんの力をかりて、写真真のような作業を、樹木の休眠期であるこの11月に行いますので、是非とも、ご協力をお願いします。



五郎沼の桜に施肥作業
日時：11月8日(土)8時～
場所：五郎沼駐車場に集合！
(スコップ、手袋持参)



県博テーマ展の主幹の羽柴直人先生が案内する青森・秋田方面ツアーにて、奥州平泉・藤原氏四代泰衡の命日に最終の地を紫波町観光交流協会々員が尋ねて来ました。
……源頼朝に追われ蝦夷地に逃れようとして「にえの柵」に家臣河田次郎を頼って立ち寄ったところを、その裏切りにあつて殺されました。文治5年(一一八九)9月3日、地元の人々は、そのことを次のように語り伝えていきます。
『河田次郎は泰衡をかまくつて罪になるより泰衡を討つて頼朝の恩賞をと考え、主人殺しの罪にならずに泰衡を討つ計画を練った。』

泰衡(平泉藤原四代)最終の地 秋田県大館市の「錦神社」のお話

9月3日の夜、次郎は多くの家来を使って頼朝の大軍が攻め入ったように見せかけ泰衡が観念して切腹するよう仕向けた。この計画は成功し次郎は泰衡の首をはねた。

その後、首の無い泰衡の死体は里人によって泰衡の着て来た錦の直垂に大事に包まれて埋葬がされたという。

この墓が、「にしき様」と呼ばれて錦神社となり、毎年旧暦の9



錦神社を保存している松田館町内会長



錦神社



松田会長より説明を聞く紫波町観光交流協会々員

月3日にお祭りが催されている。』
ここから南西約3km離れた大館市内町五輪台には、泰衡のあとを慕い長い旅を続けてきた奥方と忠僕にまつわる話が伝わり、奥方が命を絶つたといわれている地が西木戸神社として祀られています。……
◎参考「大館市の史跡」
～錦神社の場所～
秋田県大館市二井田上出向
①JR奥羽本線大館駅より車で40分
②JR花輪線扇田駅より徒歩15分
③東北自動車道 十和田インターより車で30分
問い合わせ
大館郷土博物館(大館市
釈迦内字獅子ヶ森1)
☎0186-14812119

「比爪風」かわらけ

平泉勢力圏の内部構造

- 藤原清衡が比爪の地に子息の清綱を配置したのは、「奥六郡を管轄し支配させること」、「北奥への進出拠点として機能」の三点であったと判断したい。
 - 比爪の求心力は、さすがに平泉には及ばないであろうが、少なくとも、平泉勢力圏の北半部(奥六郡北部、鹿角、比内、糠部、津軽、外ヶ浜)の範囲中では突出した最上位の権力機構であったことは確実である。
 - 器壁が平泉の手づくねかわらけは薄手なのに対し、比爪、矢立廃寺、浪岡城の手づくねかわらけは厚手であり、また、胎土の色調が平泉が白っぽいのに対し、比爪、矢立廃寺、浪岡城は燈色のものが目立つというように、比爪、矢立廃寺、浪岡城の手づくねかわらけには類似点が見受けられる。
 - 「比爪風」の三段なかかわらけが比内の矢立廃寺、さらに津軽の浪岡城内館に存在するという事は、手づくねかわらけ工人の移動といったレベルの問題ではなく、奥州藤原氏の比内、津軽における実質支配は、比爪系統の集団による主導で行なわれた可能性をも示唆する。
 - 奥六郡の支配の拠点は、この区域の南端に位置する「平泉」と、中央に位置する「比爪」の2箇所があり、奥六郡は南北に区分して管轄されていた可能性がある。
 - 「比爪」は平泉と比較して遜色のない規模と格式を有しており、平泉と並立する平泉勢力圏内の拠点と評価すべきである。「比爪」は陸奥奥六郡の北部の志和郡に位置しており、奥六郡北半は比爪の管轄であったと推測される。そしてさらに手づくねかわらけの調整形態の共通性から、比内、津軽方面の北奥地域と「比爪」の関係の深さも推測され、平泉勢力圏の北半部の実質支配は比爪勢力が担っていた可能性が指摘される。
- ※勢力圏内部の権力分立を具体的に指摘したことは、奥州藤原氏の権力構造の本質を解明する上で重要な提示と考える。

(岩手県立博物館 羽柴直人先生 学位論文より)



矢立廃寺跡の三段なかかわらけ
(大館郷土博物館蔵)



浪岡城跡出土のかわらけ
(青森市教育委員会蔵)

五郎沼経塚

五郎沼経塚は、昭和9年に「恩賜の郷倉」建設の際に偶然発見された経塚です。その具体的な地点ははっきりしていませんでしたが、比爪館に南接する五郎沼の南東岸に所在したと推測されます。(国道4号沿いの五郎沼の東側の堤に連続する形で自然地形の小高い丘があり、ここに所在していた民家の屋号が「ごうそう」と称されており(現在民家は移転)、この地点が経塚の造営場所と考えられます。

比爪館の南方に相当する自然地形の高まりで、何らかの宗教的仮託がなされた地点と考えられます。昭和26年5月刊行の「奥羽史談2巻2号」にこの経塚の発見時の様子が掲載されています。

〜紫波郡赤石村〜五郎沼の経塚
富山英一郎

(前略)：五郎沼の経塚は享保年間、蛇蟻塚と知られ紫波郡赤石村大字南日詰に在る。これは北隣の古碑数基ある箇所と反対に、南東の丘陵で昭和九年に郷倉建設の爲地下を掘って判った。地下数尺の處(とこ)に地盤を固めて周囲に石を置き、中央には経瓶を据え素焼と青銅の二重経筒に経文が納められていた。

経瓶の蓋上に魔除の短刀、石柳様の数個の川石があり、底は粘土を敷き木炭を入れ筒の上を葎石で盛っていた。百の史観もさることながら、これは實際の話である。紫波郡の歴史は：(後略) 註 経筒と経文は現在小學校に保管、直刀及び青銅筒は別に保管してある。



経塚跡より五郎沼を見る



南側からの経塚跡
(階段等、徐々に整備中)

このように五郎沼経塚では、銅製経筒を用いた作法に則った納経が行われており、格式の高い儀礼がおこなわれたことを読み取れます。

(岩手県立博物館テーマ展
「比爪」〜もう一つの平泉〜
資料より参照)



北側からの経塚跡

